

吾人以て如何となす。

肉體は土より出でて土に歸り、靈は空より出でて、漠として去る、而も靈たるや生を育み、常に進化創造の神として、否佛として體ては、人生の確付者たるなり。吾人人生に倦める時、或は自然の驚異に、神ありと信する時、其の人の生命の中には、神あり佛存在す。

而して此の觀念の延長は、引いては宗教の偉大なる部分として、運動を補佐するなり、所謂る吾人佛を信するとは、過去の有限的覺體を信するにあらず、又理想の影を追跡するにあらず、換言すれば佛とは全能なる力にして、信するは圓滿なる佛の行爲は吾人の近く否吾人の實際に働くにある、此の信仰の爲めに吾人努力の必要あり、修養の根底を有するなりと、云はざるべからず。あゝ白砂綠上の偉聖、日蓮上人の、千古不朽の尊像に對する時、吾人は深く上人の、過去を追想し求心的に總ての果徳を、吾人の小なる五尺余寸の、身上に根ざさんことを希ふ。



偶 感

小坂田龍教

一、本尊の濫授

私は日頃から我宗殊に勸財上手な坊様達に依て、その相手の信不信に關らず、寄附金の額により、施物の

夥少により矢當らに本尊が濫授せらるる事を深く感じて居ます、その事がよいか悪いか云ふ事は今更にて云ふ迄ありません、宗祖日蓮上人が大尼御前に與られた嚴しきお諭へを思ひ合す時、彼等勦財巧者な偉い坊様達はどんな感じがするでしょう、彼等は絶對歸命の正境たる真正な本尊を何んと思つて居るのでしょうか、施物のお返しか寄附金の領收證位に考へて居るのでしうか敢へて諸師の一考を煩します、先年御大典の奉獻本尊に對しても當時可なり物議を醸もした様でした、これは授ける者ばかりではなく受ける方でも考へが間違つて居るのであります、ごうかして此の狀態を打開して、本尊をしても少し價値ある眞正な本尊にしたいと思ひます。

一、死せる教

世の中が開けると共に人々は色々の方面に賢くなりました。殊に人を欺かす事が上手になりました、口先きでか、肩書でか、見てくれでか、色々な方法で人を欺かす事を考へて居る、だから今では何々博士とか學士とかさう云つた肩書がなければ人が相手にせぬ様になつた、で自然に人々は實力は第二として金力か権力によつて肩書を得様と競ふ様になつた、それにつれられて宗教家殊に布教家に此傾向を有する人が大分ふへて來た、彼等は演壇の上で講座の上で如何にせば人々を感動せしむるかに吸々として日も足らざる有様である、其處に何等の信仰と自覺もありません、ですから一時人々を感動させた割合その感化力は甚だ僅少であります、これ彼等が一向教義の深遠を頼りこし自分の技巧を頼りこして其處に何等の力と云ふものがないからであります、如何に教義が高遠であつても蓄音器では人々を化する事は出来ません、宗教は教理も大事ですがそれよりも布教家宗教家そのものの人格が大切であります、偉大なる人格の前には何等の批判力も要しません、これから教壇上に立つ青年宗教家の一考を願ひます。